

古文

うたの心 「詩歌」

折々のうた 大岡 信 「全四回」④

梁塵秘抄・閑吟集

梁塵秘抄・閑吟集

大岡信『折々のうた』に取り上げられた『梁塵秘抄』と『閑吟集』の歌を、その解説文を参考としながら読んでいきます。歌謡に関する基礎知識を押さえたうえで、それぞれから一つの歌を読み、歌謡の表現の特徴を考えます。

学習のねらい

● 学習のポイント ●

- 〈一〉歌謡の特徴について知る
- 〈二〉「舞へ舞へ蝸牛……」の歌を理解し鑑賞する
- 〈三〉「思へど思はぬ……」の歌を理解し鑑賞する

『折々のうた』は、もともと新聞の一面に毎日連載されたものですが、二十五年以上、通算六七二回に及びました。それだけ日本には、さまざまなジャンルのすぐれた詩歌がたくさんあるということになります。

■ 歌謡の特徴について知る

- 歌謡とは
- 歌詞にリズムと曲をさまざまな形で付けて、音楽の伴奏とともに歌う歌のこと。
- 歌謡には多くのジャンルがあった。

「代表的な歌謡集」

● 『梁塵秘抄』

- 平安時代の終わり、一一八〇年頃成立。
- 編者は、後白河法皇。
- 全二十巻。うち歌集は十巻。現存は第一巻の一部と第二巻のみ。
- 「今様」というジャンルの歌を集めたもの。

● 『閑吟集』

- 室町時代、一五一八年。
- 「小歌」というジャンルの歌を中心にまとめたもの。



講師
山本章博

■「舞へ舞へ蝸牛……」の歌を理解し鑑賞する

子どもたちが蝸牛に向かって、舞わなければ子馬や子牛に蹴らせて踏み割らせるぞ、かわいく舞ったら花園につれていってやる、とはやしたてている歌です。子どもたちの心や様子を想像してみましょう。

【重要語句】

・うつくし……小さいものや弱いものに対して、かわいいと思う気持ちを表す。

■「思へど思はぬ……」の歌を理解し鑑賞する

恋に関する歌です。相手のことを思っていないでも、思っていないふりをして、しゃっとしている人は底が深い、という歌です。「しゃっと」というのはどういう態度のことか、また「底が深い」とはどういうことか、考えながら鑑賞しましょう。

*『閑吟集』でこの歌の次に並べられている歌

思へど思はぬ振りをしてなう 思ひ痩せに痩せ候

〈現代語訳〉

思っていないでも思っていない振りをしてなあ、痩せに痩せてしまったのじゃ。



古文

折々のうた 大岡 信

梁塵秘抄・閑吟集

講師
山本章博

梁塵秘抄

舞へ舞へ蝸牛 舞はぬものならば

馬の子や牛の子に蹴るさせてむ 踏み破らせてむ

まことにうつくしく舞うたらば 華の園まで遊ばせむ

【現代語訳】

舞い踊れ、舞い踊れ、蝸牛よ。舞わないならば、
子馬や子牛に蹴らせてしまおう、踏み割らせよう。
本当にかわいらしく舞ったならば、花の園まで連れて行ってあげよう。

平安歌謡。歌謡には大人の歌、それも恋の歌が多い。歌謡の性質上当然といえるが、中にこの歌のような童謡が混じっているのは楽しい。蝸牛に向かって、舞え舞え、舞わぬと馬の子や牛の子に踏みつぶさせるよ、とはやしている。蝸牛が立って舞うはずもないが、ここではのびした首を振る様子を舞と見たものか。蝸牛をマイマイというが、その音のつながりもあるかもしれない。

閑吟集

思へど思はぬ振りをして

しやつとしておりやるこそ底は深けれ

【現代語訳】

思っても思っていないふりをして
しやつとしていらしやる人こそが底は深いのだよ。

室町歌謡。女から見た男の理想像だろう。「隆達小歌」にも「思へど思はぬ振りみせてすき間に見る目のいとしさや君」のような歌謡がある。また同じ『閑吟集』には「しやつとしたこそ人はよけれ」という小歌もある。「しやつと」して底深い男は、昔も今もイケな男の典型だった。しかし『閑吟集』の編者はなかなかの皮肉屋である。「思へど思はぬ振りをしてなう 思ひ瘦せに瘦せ候」。掲出歌の次にはこの歌がある。